

キャラクター名 オールダム	プレイヤー名
------------------	--------

シンドローム	サラマンダー		ワークス	FHチルドレンA	カヴァー	マスターエージェント
	サラマンダー					
オプション			年齢	16	性別	男
覚醒	憤怒	衝動	憎悪	初期侵食率	35	%
出自	義理の両親	経験	伝説	邂逅	愛	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	32
肉体	4	1	0			5	行動値	4
感覚	0		1			1	(非装備時)	4
精神	2		0			2	戦闘移動	11
社会	2		0			2	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	9		射撃			RC	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達		
運転:			芸術:			知識:			情報:	FH	5
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
禍(滅びの刃)	白兵	5r+9	6(9)	10(20)		カの証により取得。メインプロセス終了時浸蝕率+2。浸食率が100%を超えたら()内のデータ
60↓	白兵	10r+9	6	50		装甲無視
100~129	白兵	8r+7	9	64		装甲無視
禍焔眼閻魔	白兵	5r+7	9	20		社解時の名前。滅びの刃の100%以上。

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
ウェポンケース	
思い出の一品	
オーヴァード剣術(オーヴァードシールド相当)	
パワソース・ピサイド	
オーヴァードダッシュ	

合計装甲:	0	合計回避:	0
-------	---	-------	---

ロイス			
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス消費
Dロイス:超血統P		N	
師であり最愛の母:アイビーP	遺志	N劣等感	
滅亡魔王:朝日凶夜P	羨望	N嫉妬は毒が溜まる! 毒がない	
シナリオロイス:終焉望みし毒鉄P	気が合いそうだな	Nなめてるのか? てめえ	
及川マユミ(タイタス昇華)	Pズルいのか	N無関心	
庵谷 鴉	P奪うぜ、お前の全て	N自分が薄いんだよな	
少女	P庇護	N憐憫	

最大財産P:	4	残り財産P:	1
--------	---	--------	---

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト	3	2	メジャー	-	-	-	-	
効果:	CL-Lv							
炎の刃	10	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果:	攻撃力+[Lv×2]							
結合粉碎	5	4	メジャー	-	-	対決	ピュア	
効果:	装甲無視。ダイス+Lv個							
氷盾	5	2	オート	至近	自身	自動成功	-	
効果:	ガード値+[Lv×5]							
氷雪の守護	5							
効果:								
ダイヤモンドダスト	1							
効果:								
炎の理	★	-	メジャー	至近	効果参照	自動成功	-	
効果:	炎を作り出すエフェクト。必要ならばRC判定							
氷の理	★	-	メジャー	至近	効果参照	自動成功	-	
効果:	手に触れたものを冷やすエフェクト。必要ならばRC判定							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

【設定】  
物心つく前にオーヴァードの抗争に巻き込まれ、両親を亡くし、一人の女に拾われた。その女は周りからマスター・サムライと呼ばれていた。女は俺に教育と戦闘方法を教えた。生きるために必要だという。  
ある日、女が任務のために長期間出掛けたとき、これはとあるFHセルに預けられた。そこで一人の女の子と出会う。名前は友妃という明るい子だった。よそ者である俺にも親身に接してくれる彼女を俺は好ましく思っていた。しかし、数日後いつも来るはずの彼女が来なかった。不信に思った俺はセルを探し回り……地獄を見た。自分と同年あるいは下くらいの子供たちが人体実験されていたのだ。響き渡る悲鳴、子供たちの泣き顔……そして実験に失敗した友妃の姿。俺は友妃に駆け寄ったが、何もできず、ただ彼女の最後の言葉を聞いた。「今日……会いに行けなくてごめんね……」。その言葉を聞いたとき俺の中の何が壊れた。「殺してやる」。"生き物を物としてしか見ないてめえら外道は全員……俺が駆逐する!"身を滅ぼしかねないほどの黒き憤怒。あまりにも強すぎた怒りの業火は、体内に眠っていたレネゲイドウイルスを無理矢理活性化させ、俺はオーヴァードに覚醒した。それからは殺戮が始まった。研究員の心臓を燃え盛る手で貫き、銃を奪い射殺し、首を刀で切り落とした。命乞いする奴らもいた。「俺達のような研究員の作った薬は大概生物実験だ。その恩恵をお前も受けているんだぞ」と。「ああ、そうだ。そうだろうな。だが、その論理は善人に偽善者にこそ効く。教えてやるよ。例え、その実験で何億の命が救われようが、俺がムカついたら殺す。俺は鬼になる」容赦なく、一人も生かさず殺し尽くした。女が帰ってきたとき、俺のサラマンダーの力の炎の刃を見て、とあるFHの研究所に連れていかれた。何でもそこはオーヴァード同士の蠱毒の研究をしていて、ちょうど炎の刃の蠱毒を開始するとのことだった。俺を実験体にするつもりかと問うと、ここは全て修羅の道を行く者たち。真に強き者となるためには彼らを越え屍を背負い進めと言われ、俺は参加した。戦闘訓練の成果と実戦経験もあって何とか勝ち抜いた。力が強くなった感覚はあまりなかったが、そこにいたコードウエル博士という奴が、「マスターの名を受け継いだとき、真価を発揮するだろう」そう予言じみた言葉と証を残して去っていた。

それから、女との生活は続いた……だが、その日々は唐突に終わりを告げた。いつものように買い出しに行き、いつものように何もなくて帰ってきた日だ。俺「ただいま……マスター？」形式上、女のことはマスターと呼んでいる。その女から返事がない。どこかに出掛けでもしたのだろうか。そう思い荷物を置いて自宅に戻ると扉は壊れ、中は凄惨なものとなっていた。窓も割れていた。壁にはいくつもの刀傷や爪痕があった。だが、それ以上に……俺「……マス……ター……?」